

- 9:00 Breakfast 昨日同様の方式。良好な European breakfast を採る。
- 9:30 トラック様ツクツクがバスまで送るため迎えに来る。欧米人ツアーリスト1組と同乗。
- 10:45 或るゲストハウス前に停車中のバスに乗り込む。欧米人ツアーリスト女性2名が積み残しになる。次の便(午後の便)にするよう言われている模様であるが、少しトラブル。往々にしてこう言うミスが生じるようである。満席状態にてようやく発車。
- 11:00 少し中心部から離れた北部方面へのバスターミナルに到着し、出発準備のためしばらく停車。その間、運転手は多くの荷物を屋根にのせ、小荷物は運転席横へ。荷物の運送の受託も兼ねているようだ。場合によっては、封書なども届けるとのこと。運転手の収入になるとのサチの説明。
 ようやく、VANG VIENGに向けVIENTIANE市内を出発。
 延々と平野部の国道13号線をひた走る。国道と言えども、その整備水準は低い。路盤にアスファルト舗装がほどこしてあるのみ。歩道は勿論のこと、舗装止、側溝、センターラインもなし。
 バイク、トラック、普通バスをけたたましく警笛を鳴らしながら、猛スピードで追い越して走る。VIPバスと言うものの、空調はあるがまともに機能せず。途中からは、その空調もスイッチを切る。
- 12:30 小規模な町並みを形成している地点で小休止。トイレ休憩。軽食をとるものあり。
 アイスクリームで休憩。
 この小休止以降、しばらくしてバスは山間部に入る。上りではバスは喘ぎながら走る。下りはまた、猛スピードで降りていく。これを繰り返して、途中、ナムグムダムを見て、湖畔で停車。受託した荷物を降ろすためである。
- 14:30 バスは国道筋の本来のバスターミナルから、ベトナム戦争時代の広大なアメリカ軍ヘリコプター基地を横切って、と或るゲストハウスに横付け。(乗客全てがツアーリストであるため。)到着と同時に、ヘリコプター基地越しに異様な山容が目に入る。VANG VIENG 区域に入ってすぐ、車窓から巨大なセメント工場を見た。後でわかるが、あらゆる処に鍾乳洞(現地では Cave と称してツアーリストの Caving のポイントになっている)がある。
 一帯が石灰岩の台地である。
 バスから徒歩でホテルへ向かう。新設のホテルらしく、案内書に記載なし。
 探りあてて、歩く。バッグのキャスターが役を成さない道路。中国系住民が集まり、何やら、テントの下で飲み食いして談笑している。地域に災難が降りからからないように、お祈りする行事とか。
 途中、バーバーを兼ねて経営する店でペプシコーラで休憩。
- 16:00 ホテルELEPHANT CROSSING 到着。
 チェックイン後、街へ出て、散策。サナサイレストラン(SANAXAY)夕食。
 Stake, Springroll, 焼きそば風麺、ビアラオ
- 20:30 ホテル帰着。



↑ VIENTIANE バスターミナル ↑

VIENTIANE→VANG VIENG の車窓風景（平野部）揺れるバス車窓・・・ブレは容認を



遠くに水田、手前は休閑・二期作
地域だが、輪環



水稻作



林間にハンモック



乾季だが河川にはかなりの水量



極、標準的な農家住宅



蓄財による改築・高床にレンガ積で部屋を。
到る処で改築・増築工事が見られることとなる



ファームポンドとも言えない水溜まり。
魚を捕る姿も。



耕運機が。交通手段としても使う。



↓ 行程中、ナグムグ (Nom Ngum) ダムの風景に出会う ↓



ナグムグ (Nom Ngum) ダム。1971年、日本などの援助により建設されたダムにより、巨大なダム湖が出現した。生態系破壊との批判がある一方、豊かな漁場として漁獲は Vientiane へ供給され、地域経済に貢献していると言われている。先に見た Vientiane のタラートの淡水魚もここから出荷されたものもその一部に。発電された電力はタイへ輸出され、外貨獲得に貢献しているとも言われる。水面に出現した島には社会主義政権樹立時代に反動分子が送られ政治教育の場にされた。今なお、「男島」「女島」として男女別の刑務所として使われているという。・・・旅行案内書情報・・・Hmong の悲劇の時代と重ねて思うとき、特別の感慨を感じる。・・・日本の援助による湖島の出現であることを思うと。現在ではボート遊びをして、湖岸のレストランで魚料理を楽しむのが一般的なツアーリストのやり方。遊覧ボートや漁船が湖岸に停泊している風景が見える。写真にも漁船の姿が。



← 湖畔の集落の風景、こうした中に船着場があり、遊船、漁船が停泊。運転手はこの集落で運搬受託した荷物を降ろした。



← 近くで木材を切り出す様子も

↓ 【ベトナム戦争時代のアメリカ軍のヘリコプター基地跡】 ↓



南を



東を



南端を



東を。建物あたりがバスターミナル



東北を



北を

Vientiane から180KMの緑深いナムソン河畔に Vang Vieng がある。

1970年代のラオス内戦（ベトナム戦争中）中は北部山岳地帯に展開する共産軍掃討のため、基地を建設し、日夜アメリカ軍のヘリコプターが出撃して行ったところだ。広大な基地がそのまま残されている。舗装は部分的に残り、当時は彷彿とさせるが、ほとんどは、はがれ、デコボコの土。ここをツクツクが土煙りをあげて、横断して、街とバスターミナルを結ぶ。



↓ピエンチャンへ向かうバスが到着。客待ちのツクツク↓



広大な基地の向こうに特異な山容が迫る。



バスが横づけしたゲストハウス。ここからホテルへ歩くことになる

消耗戦に疲弊したアメリカ軍兵士に女性とアルコールなどを提供する慰安施設としてこの街並みが形成された基地の街と思われる。背後の険しい岩山と鍾乳洞、ナムソン川の清流は絶好のリクリエーションの場になり、若い兵士を心身ともに癒したものと思われる。いまでは、国道の開通で河、山の資源に恵まれていることから、ツーリズムのポイントになったと思われる



↑ホテルへの途中、散髪屋と小さな店を営む女性と出会い、ペプシで休憩。30歳半ばの女性にこの街がいつ頃出来たのか聞くと、「嫁いでくる前のことは知らない。年取った人に聞くとわかるだろう。その年代には英語が話せる人が多い」との答え。散髪代はラオス人は日本円で150円程度。外国人はその何倍もいただく。税を徴収されるからとのこと。徴税能力が国の統治能力のバロメーターとすると、この国の統治能力はかなりのもの。このことは、旅行中、あらゆる観光スポットの入場券で認識することとなる。散髪屋は椅子と鏡と簡単な流しだけの質素なもの。ラオス人一人が散髪中。

客には、バスから見た、セメント工場の従業員などが多いとのこと。



←バスターミナル。ルアンプラバン、ピエンチャン行きの便がある。僧侶の姿が見える。ルアンプラバンにでも移動するのか。料金表は英語表記がある。ちなみにルアンプラバン mini bus 95000K, express bus 85000K, Normal bus 75000K とある。1万kは約140円余。



← バスターミナルの
トイレ。1000K



← 国中どこでも建築ブーム。ツ
ーリズムが興ると施設整備、建
材業、住宅機器業、什器類、イ
ンテリア、商品生産農業まで
その野が広がる。地域経済の循環
の原型を見る思い。





↑夕食を採ったレストランからの暮れなすむころ。



↑ 日がな、ラオス風の床に寝そべるスタイルでテレビを見ながらビアラオで寛ぐ外国人ツーリスト。
こうした過ごし方が好まれる。テレビはタイや日本のカーン。
ラオスの欧米人ツーリストは昔は食いつぶし者のバックパッカーのイメージだが、今日、知的水準は高い連中と見える。